

黄金の郷

こしえるびと

つむぐストーリー vol.129

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

おいしいリンゴの魅力を広めたい

川崎町薄衣 三浦 慶照 さん

家業の手伝いからのスタート

深い山あいの一面に広がるリンゴ園。果実に触れながら、一個一個の品質を確認する三浦慶照さんの姿がある。

リンゴ農家に生まれた慶照さんは、「将来は農家になるんだろうな」と思いながら育った。高校卒業後は農学部のある大学に進学し、農業経済学を専攻。農業を通じた町おこしなど地域経済を中心に学び、卒業後に実家に戻り就農を果たした。栽培管理はゼロからのスタート。剪定の手伝いから、一つ一つ技術を習得する日々が始まった。

研究を重ねる生活

現在20種類以上のリンゴを育てているだけに、「収穫期はとにかく忙しい」と語る。収穫の後も選果や梱包などの

作業が山積みで、「いかにして良い状態で収穫し、出荷日に間に合わせるか」というスケジュール管理がいまだにうまくできない」と苦笑する。

栽培管理と品質の向上のために、10年ほど前から植物ホルモンの勉強を始めた。そこで得た知識を基に試行錯誤を重ねるうちに、樹が自分の期待通りの反応を見せるようになってきたという。例えば、剪定するときこれまで立枝を切り落としていたが、植物ホルモンの循環を活発にし樹を元気にする狙いで、立枝を残す切り方に変えた。すると読み通り、植物ホルモンの活性が高まり、大きくて食味の良い実をつけるようになった。「勉強したことが役立つのがうれしい」と、やりがいと充実感を感じている。

喜ばれるリンゴを作るために

昨年から川崎小学校の農業体験授業を受け入れ始めた。摘花や収穫を体験した子どもたちからは「いい香りがする」「花がきれい」などの言葉が飛び出し、「新鮮な感覚に包まれる」と話す。仕事としてたくさんリンゴを取り扱う中で、「子どもたちのポジティブな言葉に驚かされ、励みになる」と慶照さんは目を細める。

慶照さんにとってリンゴを生産するやりがいには、一番おいしい時期に収穫と出荷をし、食べる人に喜んでもらうこと。栽培管理はもちろん、消費者への情報発信の腕を上げ、もっと多くの人に喜んでもらいたい。20年以上のキャリアを重ねなお、慶照さんの成長はまだまだ止まらない。



PROFILE

三浦 慶照さん (43)

Yoshiteru Miura

川崎町薄衣

1982年川崎町薄衣生まれ。大学卒業後に家業のリンゴ園で就農。ふじ、はるか、シナノゴールドなど20を超える品種を手掛ける。リンゴ1.2畝、水稲1.2畝。両親、姉、妻、子と6人暮らし。

